

---

## 2020年度日本語教育センター活動報告

---

### 1. 2020年度日本語教育センター運営体制

#### 運営委員会

- センター長：丸山 千歌 (異文化コミュニケーション学部教授)  
副センター長：韓 志昊 (センター長指名による、観光学部教授)  
運営委員：井川 充雄 (全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、社会学部教授)  
運営委員：巖 成男 (経済学部教授)  
運営委員：松田 宏一郎 (法学部教授)

#### 実務委員会

- センター長：丸山 千歌 (異文化コミュニケーション学部教授)  
副センター長：韓 志昊 (観光学部教授)  
センター員：池田 伸子 (異文化コミュニケーション学部教授)  
センター員：金庭 久美子 (特任准教授)  
センター員：藤田 恵 (特任准教授)  
センター員：数野 恵理 (特任准教授)  
センター員：小林 友美 (教育講師)  
センター員：任 ジェヒ (教育講師)  
センター員：小松 満帆 (教育講師)  
事務局：吉田 友子  
事務局：宮本 杏子

#### 兼任講師

- |        |        |
|--------|--------|
| 浅野 有里  | 富倉 教子  |
| 井上 玲子  | 長島 明子  |
| 神元 愛美子 | 長谷川 孝子 |
| 川端 芳子  | 布村 猛   |
| 小森 由里  | 東平 福美  |
| 斉藤 紀子  | 開 めぐみ  |

佐々木 藍子	平山 紫帆
沢野 美由紀	三浦 綾乃
高嶋 幸太	山内 薫
武田 聡子	森井 あずさ
谷 啓子	

## 2. 活動報告

日本語教育センターホームページにて3月末公開予定

<https://cjle.rikkyo.ac.jp/reports/default.aspx>

目次（予定）

1. 各科目についての報告
2. 2020年度 Placement Test 実施報告
3. 2020年度日本語相談室実施報告
4. 2020年度立教大学漢字検定試験実施報告
5. 2020年度日本語自主学習用図書貸し出し実施報告
6. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告
7. 日本語教育センターシンポジウム実施報告
8. 日本語教育センターニュースレター発行報告
9. 短期日本語プログラム報告
10. センター員活動報告
11. 2020年度FD記録

---

## 日本語教育センターセンター員 教育研究業績一覧

---

### 池田伸子

#### 研究論文

1. 「海外日本語教育——高度人材獲得の視点から言語文化政策としての日本語教育を再考する」『先の見えない今～人、地域、文化、社会をつなぐ「ことば」を考える（立教大学異文化コミュニケーション学部研究叢書Ⅲ）』晃洋書房、2020年、32-70頁
2. 「オンラインによる日本語学習支援活動を通じた学びに関する質的研究——KJ法による自由記述の分析を通して——」『日本語・日本語教育』立教大学日本語教育センター、2021年、21-34頁

#### 報告

1. 「立教大学日本語教育センターにおけるオンライン授業の取り組み」（藤田恵・数野恵理・金庭久美子・小林友美・任ジェヒ・小松満帆・丸山千歌との共同執筆）『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1-20頁

#### 講演

1. 「大きく社会を変えるために、まず小さく始めてみませんか」2020年栃木県女性団体連絡協議会研修会、於栃木県男女共同参画センター、2020年11月5日

#### 研究助成

1. 2017.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価——持続可能で有用な開発型評価とは」（研究分担者）（課題番号：17K02863）

### 丸山千歌

#### 研究論文

1. 「地域・文化・社会をつなぐ日本語教育——日本語教育人材の養成・研修の観点から——」『先の見えない今～人、地域、文化、社会をつなぐ「ことば」を考える（立教大学異文化コミュニケーション学部研究叢書Ⅲ）』晃洋書房、2020年、22-31頁
2. 「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触——日本に住み、働きつづける日本留学経験者Cの場合——」（小澤伊久美との共同執筆）『日本語・日本語教育』立教大学日本語教育センター、2021年、35-54頁

#### 報告

1. 「立教大学日本語教育センターにおけるオンライン授業の取り組み」（藤田恵・数野恵理・金庭久美子・小林友美・任ジェヒ・小松満帆・池田伸子との共同執筆）『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1-20頁

教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1-20頁

#### 研究発表

1. 「組織的な学びを促す評価—大学日本語教育部門構成員への聞き取り調査から—」、第21回日本評価学会大会、zoomによるonline開催、2020年11月28日（小澤伊久美との共同発表）<http://evaluationjp.org/activity/start.htm>
2. 「間モード再構築法としてのPAC分析」（小澤伊久美・サトウタツヤとの共同ポスター発表）、2020年度人間科学研究所年次総会、zoomによるonline開催、2021年2月27日～3月6日、立命館大学人間科学研究所

#### 講演

1. 「パンデミック中の日本語オンライン授業の方針・方法・評価—立教大学の取り組み—」（数野恵理と共同で講演）、2020年度インドネシア日本語中学校・高校日本語教師会 オンライン国際セミナー・ワークショップ、zoomによるonline開催、2020年8月8日
2. 「PAC分析入門」（小澤伊久美との共同講義）、小出記念日本語教育研究会主催ワークショップ、zoomによるonline開催、2021年2月26日

#### 研究助成

1. 2017.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育プログラムを対象とした開発型評価—持続可能で有用な開発型評価とは」（研究分担者）（課題番号：17K02863）
2. 2020.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「「日本とつながって生きる」選択から見える日本語教育の新時代」（研究代表者）（課題番号：20K00707）

#### 数野恵理

##### 報告

1. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応—2020年度の立教大学日本語教育センターの取り組み—」（藤田恵・金庭久美子・任ジェヒ・小林友美・小松満帆・池田伸子・丸山千歌との共同執筆）『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1-20頁
2. 「レジュメ作成とビジターセッションにおけるレジュメ発表」（金庭久美子との共同執筆）『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、131-146頁

#### 研究ノート

1. 「第二言語としての日本語ナラティブ作文の評価基準とルーブリックの開発」（坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子との共同執筆）『大阪観光大学紀要』第21号、大阪観光大学、2021年（印刷中）

#### 研究発表

1. 「日本人大学生が書いたナラティブ作文の評価—日本語ナラティブ作文用の評価項目を

用いて——」（坪根由香里・トンプソン美恵子・影山陽子との共同発表）日本語教育学会 2020 年度秋季大会、zoom による online 開催、2020 年 11 月 29 日

2. 「プロンプトによるナラティブ作文の評価の違い——タイプの異なる『よいナラティブ』の提示——」（影山陽子、坪根由香里、トンプソン美恵子との共同発表）第 52 回アカデミック・ジャパニーズ・グループ定例研究会、zoom による online 開催、2021 年 2 月 13 日（予定）

#### 講演

1. 「パンデミック中の日本語オンライン授業の方針・方法・評価——立教大学の取り組み——」（丸山千歌との共同講演）2020 年度インドネシア日本語中学校・高校日本語教師会 オンライン国際セミナー・ワークショップ、zoom による online 開催、2020 年 8 月 8 日

#### 研究助成

1. 2019.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（B））「日本語ライティングにおけるナラティブの Good Writing 探究と評価法の開発」（研究分担者）（課題番号：19H01274）

### 金庭久美子

#### 研究論文

1. 「YNU コーパスにおける「テシマウ」の使用の特徴」（金蘭美・曹娜との共著）、『日本語・日本語教育』第 4 号、立教大学日本語教育センター、2021 年、55-73 頁
2. 「作文支援システムに必要な「支援」——日本語学習支援システムの変遷と展望——」（金蘭美との共著）、『ときわの杜論叢』8 号、横浜国立大学国際戦略推進機構、2021 年（印刷中）
3. 「日本語：日本語インタビューテストにみられる応答開始時のレベル別特徴——「くり返し」と「考えている」表現に注目して——」（西部由佳・岩佐詩子・坂井菜緒・萩原孝恵・奥村圭子との共著）、『小出記念日本語教育論集』29 号、小出記念日本語教育研究会、2020 年（査読有・印刷中）
4. 「「てしまう」の指導法に関する一考察——物語タスクにおける使用状況の分析から——」（金蘭美との共著）、『日本語教育方法研究会誌』Vol.27、日本語教育方法研究会、2021 年（印刷中）

#### 報告

1. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応——2020 年度の立教大学日本語教育センターの取り組み——」（藤田恵・数野恵理・任ジェヒ・小林友美・小松満帆・池田伸子・丸山千歌との共著）、『日本語・日本語教育』第 4 号、立教大学日本語教育センター、2021、1-20 頁
2. 「レジュメ作成とビジターセッションにおけるレジュメ発表」（数野恵理との共著）、『日本語・日本語教育』第 4 号、立教大学日本語教育センター、2021 年、131-146 頁

## 研究発表

1. 「日本語学習支援システムの変遷と展望」、口頭発表（企画発表）、韓国日本語學會 第41、42回学術大会、於韓国漢陽大学（オンライン）、2020年9月19日
2. 「初級から学べる段階別学習型作文支援システムの構築——データ収集システムの開発——」（金蘭美・川村よし子との共同発表）、ポスター発表、日本語教育学会2020年度秋季大会、於日本語教育学会オンライン、11月29日
3. 生の会話を「聞き手参加型聴解」教材へデザインする」（奥野由紀子・山森理恵との共同発表）、口頭発表、第7回年次大会、言語文化教育研究学会、於金沢21世紀美術館（オンライン）、3月5～7日（発表予定）

## 講演

1. 「聞き手参加型聴解の実践方法」、日本語専門家招聘特別講演、於韓国漢陽サイバー大学（オンライン）、2020年9月12日（招待講演）

## 研究助成

1. 2019.4～現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「初級から学べる段階別学習型作文支援システムの構築」（研究分担者）（課題番号：19K00734）

## 藤田恵

### 研究論文

1. 「専門教育機関で開講される日本語科目の位置づけと日本語教員が果たし得る役割に関する一考察——視覚特別支援学校専攻科での実践例をもとに——」（河住有希子との共同執筆）『日本語教育方法研究会誌』Vol.27、日本語教育方法研究会、2021年（印刷中）

### 報告

1. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応——2020年度の立教大学日本語教育センターの取り組み——」（数野恵理、金庭久美子、任ジェヒ、小林友美、小松満帆、池田伸子、丸山千歌との共同執筆）『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1-20頁

## 任ジェヒ

### 研究論文

1. 「バリエーション学習のあり方に関する一考察——日本語学習者による人称表現の使い分けを手がかりに——」『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、89-109頁

### 報告

1. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応——2020年度の立教大学日本語教育センターの取り組み——」（藤田恵、数野恵理、金庭久美子、小

林友美、小松満帆、池田伸子、丸山千歌との共同執筆)『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1-20頁

#### 研究発表

1. 「韓国語を母語とする日本語学習者の読解における推測ストラテジー」(野田尚史との共同発表) 韓国日本語学会第41・42回統合学術大会、オンライン開催、2020年9月19日

#### 研究助成

1. 2020.4～現在 科学研究費助成金(若手研究)「日本語学習者の多様な言語生活に対応したバリエーション教育開発のための基礎研究」(研究代表者)(課題番号:20K13092)

#### 学位論文

1. 『「学習者視点」に基づく「ことばの多様性」の学習に関する研究——「人称表現」における多様性を対象として——』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文、2020年

### 小林友美

#### 研究論文

1. 「日本人学部生と留学生の質問者による情報収集の談話展開の方法——応答者の質問者に対する印象評価とフォローアップインタビューから——」『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、75-88頁

#### 報告

1. 「第4章 5. すぐれた要約力の受講インタビューの談話にするための学習方法」『講義理解における要約力に関する研究』研究代表者 佐久間まゆみ 平成28年～令和元年度(2016年～2019年度)科学研究補助金 基盤研究(C)(一般)課題番号(16K02825)研究成果報告書、2020年、150-152頁
2. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応——2020年度の立教大学日本語教育センターの取り組み——」(藤田恵・数野恵理・金庭久美子・任ジェヒ・小松満帆・池田伸子・丸山千歌との共著)、『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1-20頁

#### 研究助成

1. 2020.4～現在 科学研究費助成金(若手研究)「相互作用を意識した会話教育のための教材開発」(研究代表者)(課題番号:20K13089)

### 小松満帆

#### 研究論文

1. 「日本語演劇ワークショップの試み——フランス国立東洋言語文化大学での「演劇アトリエ」の活動報告——」『日本語教育方法研究会誌』Vol.27、日本語教育方法研究会、2021年(印刷中)

## 報告

1. 「新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴う日本語教育プログラムの対応——2020年度の立教大学日本語教育センターの取り組み——」（藤田恵・数野恵理・金庭久美子・任ジェヒ・小林友美・池田伸子・丸山千歌との共著）、『日本語・日本語教育』第4号、立教大学日本語教育センター、2021年、1-20頁

## 執筆者一覧 (掲載順)

### 特別企画 Special Feature on Covid-19

藤田 恵 (FUJITA, Megumi)	日本語教育センター特任准教授
数野 恵理 (KAZUNO, Eri)	日本語教育センター特任准教授
金庭久美子 (KANENIWA, Kumiko)	日本語教育センター特任准教授
任 ジェヒ (YIM, Jaehee)	日本語教育センター教育講師
小林 友美 (KOBAYASHI, Tomomi)	日本語教育センター教育講師
小松 満帆 (KOMATSU, Maho)	日本語教育センター教育講師
池田 伸子 (IKEDA, Nobuko)	異文化コミュニケーション学部教授
丸山 千歌 (MARUYAMA, Chika)	異文化コミュニケーション学部教授

### 研究論文 Research Papers

池田 伸子 (IKEDA, Nobuko)	異文化コミュニケーション学部教授
丸山 千歌 (MARUYAMA, Chika)	異文化コミュニケーション学部教授
小澤伊久美 (OZAWA, Ikumi)	国際基督教大学日本語教育課程課程上級准教授
金庭久美子 (KANENIWA, Kumiko)	日本語教育センター特任准教授
金 蘭美 (KIM, Ranmi)	横浜国立大学准教授
曹 娜 (CAO, Na)	上海外国語大学講師
小林 友美 (KOBAYASHI, Tomomi)	日本語教育センター教育講師
任 ジェヒ (YIM, Jaehee)	日本語教育センター教育講師
山内 薫 (YAMAUCHI, Kaori)	明治学院大学助教

### 実践報告 Practice Reports

数野 恵理 (KAZUNO, Eri)	日本語教育センター特任准教授
金庭久美子 (KANENIWA, Kumiko)	日本語教育センター特任准教授

---

## 『日本語・日本語教育』規定

---

### 1. 投稿資格

立教大学日本語教育センター員、日本語教育センター科目担当兼任講師、教育研究コーディネーターおよび当センターにおいて適当と認められた者とする。ただし、共著の場合、前述の投稿資格を有する者が1名含まれていなければならない。

### 2. 内容

日本語教育およびその関連領域。未発表の原稿に限る。

### 3. 使用言語

日本語または英語とする。

### 4. 書式

原稿は横書きで、MS Word 形式ないしテキストファイル形式とし、A4判の用紙（40字×35行）で、研究論文は20枚以内、実践報告及び調査報告は16枚以内とする。図表、参考資料、参考文献、注などもこの分量の範囲に含める。文献等の書き方は、『『日本語・日本語教育』執筆要領』に従うこと。

### 5. 要旨

和文（400字以内）の要旨をつける。キーワードは、和文論文は日本語5語以内、英文論文は英語5語以内を付す。

### 6. 採否の決定

原稿の採否は本誌編集委員会が決定し、本人に通知する。

### 7. 編集委員

編集委員会は、日本語教育センター員から選出された4名の委員によって構成する。編集委員の任期は1年とするが、再任は妨げない。

8. 本誌の発行は年1回とする。

#### 9. ウェブサイトにおける公開

掲載論文の執筆者名、要旨、論文本文等を立教大学のウェブサイト等で公開する。

ウェブサイトにおける公開は「立教大学学術リポジトリ運用指針」に基づくものとする。

#### 10. 原稿の送付

次の①～③を下記に郵送すること。

①原稿本体（A4判）1部

②次のものを記した別紙1（A4判）1部

- カテゴリー（研究論文、実践報告、調査報告、のいずれか）
- 和文タイトル及び英文タイトル
- 著者名（和文表記とアルファベット表記）
- 和文要旨（400字以内。要旨末尾に括弧書きで文字数を記載のこと。）
- キーワード（原稿中の主要語句を5語以内）

③執筆者氏名、所属機関名、職位を記した別紙2（A4判）1部

また、MS Word形式ないしテキストファイル形式のデータを下記のアドレスに送信すること。

「日本語・日本語教育」編集委員会

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1 立教大学日本語教育センター内

E-mail: cjle-kiyo@rikkyo.ac.jp

---

## 『日本語・日本語教育』執筆要領（和文論文）

---

### 1. 投稿原稿の構成

投稿原稿は、次の部分から構成されるものとします。この順序で書いてください。（著者名は除く。）

- (1) タイトル（和文・英文）
- (2) 要旨（日本語 400 字以内。要旨末尾に括弧書きで文字数を記載のこと。）
- (3) キーワード（原稿中の主要語句を日本語 5 語以内。）
- (4) 本文（図表を含む）
- (5) 注（必要に応じて）
- (6) 引用文献・参考資料一覧

### 2. 投稿論文のカテゴリー

#### (1) 研究論文：

日本語教育および関連領域について、十分に先行研究を把握した上で述べられているもの。

A：先行研究を十分に把握した上でたてた仮説の検証を行っている実践的論文。

B：先行研究を十分に把握した上でたてた仮説の検証を行っている調査論文。

C：先行研究を十分に把握した上で行っている日本語教育に関する提案、提言。

D：これまでに行われている研究、調査論文の総括および解説。

#### (2) 実践報告：

教育現場における実践の内容、効果等が具体的、かつ明示的に述べられているもの。

#### (3) 調査報告：

言語データ、史的資料、教育の現状分析や関連する意識調査の結果など、日本語教育にとって資料的価値が認められる報告が明確に記述され、結果の分析が行われているもの。

### 3. 投稿原稿の書式・分量

- 投稿原稿は「A4 判横書き、40 字× 35 行」で作成してください。原稿はワープロで作成し、図表を含め、できるだけ仕上がり紙面に近い形で原稿を作成してください。
- 分量  
研究論文 20 枚以内  
実践報告・調査報告 16 枚以内
- 本文（英数字含む）は明朝 10 ポイント、各章の見出しはゴシック 10 ポイント（太字にする必要はありません）とし、行間も統一してください。要旨、注、参考文献・資料で文字を小さく

したり、行間をつめたりしないでください。

- 句読点は「、」「。」で統一してください（表題も含みます）。
- 注は、脚注ではなく後注にし、注の番号は（１）、（２）、（３）…としてください。
- 表番号と表題は表の上、図番号と図題は図の下に記載してください。
- 原稿は片面印刷にし、両面印刷にはしないでください。

#### 4. 資料・参考文献

##### • 資料

論文内に使用した他者の著作物（図版、写真等）は、投稿前に必要に応じて公開の許諾を得てください。

- 参考文献の書き方は、以下の基準に従うこと。

- （１）論文原稿の最後に、章番号をつけずに参考文献という見出しをつける。資料を載せる場合は、参考文献の後に、資料という見出しをつける。
- （２）参考文献は、日本語による文献（以下、日本語文献）と、外国語（英語、中国語など）による文献（以下、外国語文献）とを、それぞれまとめて、日本語文献、外国語文献、の順に記載する。
- （３）日本語文献は、第一著者の姓の五十音順に配列し、外国語文献は第一著者の姓のアルファベット順に配列する。

- 各文献で記載すべき情報は、およそ次の通りです。

- （１）単行本＜単著、共著＞の場合：著者、発行年、書名、出版社名
- （２）単行本＜分担執筆＞の場合：分担執筆者、発行年、当該章の題名、編者、書名、章番号、出版社名、ページ
- （３）学術論文の場合：著者、発行年、題名、雑誌名、巻または号、ページ
- （４）学会発表予稿集（論文集）の場合：著者、発行年、題名、予稿集名（論文集名）、ページ
- （５）教科書の場合：著者、出版年、教科書名、出版社名
- （６）インターネット情報の場合：著者（機関）、発行年、題名、URL、アクセス年月日

##### • 記載例

- （１）単行本＜単著、共著＞の場合

横山紀子（2008）『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』  
ひつじ書房

Anderson, J. R. (1983). *The architecture of cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

- （２）編著書中の論文の場合

松見法男（2002）「第二言語の語彙を習得する」海保博之・柏崎秀子（編）『日本語教育のための心理学』第6章 新曜社 pp.97-110

MacWhinney, B. (1989) Competition and connectionism. In B. MacWhinney, & E. Bates (eds.), *The crosslinguistic study of sentence processing* (pp.422-457). New York: Cambridge University Press.

(3) 学術論文の場合

宇佐美洋・森篤嗣・広瀬和佳子・吉田さち (2009) 「書き手の語彙選択が読み手の理解に与える影響——文脈の中での意味推測を妨げる要因とは——」『日本語教育』140号、48-58.

小柳かおる (2002) 「Focus on Form と日本語習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』第5号、62-96.

Papagno, C., Valentine, T., & Baddeley, A. D. (1991) Phonological short-term memory and foreign-language vocabulary learning. *Journal of Memory and Language*, 30, 331-347.

(4) 学会発表予稿集（論文集）の場合

迫田久美子・松見法男 (2005) 「日本語指導におけるシャドーイングの基礎的研究 (2) ——音読練習との比較調査からわかること——」『2005年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、241-242.

(5) 教科書の場合

日本花子・東京次郎・大阪美子 (編) (2006) 『上級者のための日本語 (2) ——読解編——』日本語教育書房

(6) インターネット情報の場合

日本語教育学会 (2020) 「『日本語教育』投稿要領」

<http://www.nkg.or.jp/pdf/toukouyoryo.pdf> (2020年6月15日アクセス)